

看護学生に対する微生物学実習による動機付けの喚起

森松 伸一、柳田潤一郎、今西麻樹子
尾崎 雅子、松村三千子、十九百君子
金川 治美、長尾 厚子、鎌田美智子

本学における微生物学教育は病原微生物や感染症に対する興味を持たせるのみならず、スタンダードプリコーションを体得させかつ自ら勉学に励むための動機付けをすることを目標としている。そのような教育の一環として本学看護学科では病原微生物学・免疫学の講義のなかで微生物学実習を今回試みた。この実習は学生が体表の微生物の分離培養や観察、さらには手洗いの効果や消毒法の検討などを通して、病原微生物の消毒法やスタンダードプリコーションなど感染症および感染制御に関連した事柄への学生の興味を引き出すことによって、自己学習への動機付けをしようとするものである。そこで今回の実習が目標とする動機付けの喚起のために有効であったかどうかの客観的評価をアンケート形式にて試みた。

対象は本学看護学科第1学年75名で、病原微生物学・免疫学の講義が開始される前に微生物学実習室にて行った。まずスタンダードプリコーションについて講義した上で、その後検体を採取させヒツジ血液寒天培地および普通寒天培地に塗抹したものをフラン室にて一昼夜37℃で培養させた。培養後、細菌のコロニーを肉眼により観察させ、学生自らコロニーから釣菌したものをグラム染色し、光学顕微鏡観察させた。各自手洗い後さらに各種消毒薬にて手指を消毒した後、スタンプ法にて手洗い前後あるいは手指消毒後の指より細菌を検出させ、コロニー数の比較と分離菌のグラム染色標本を観察させた。実習は2日間、午前中の講義時間を利用して行い、指導には専任教員3名があたった。調査はアンケート形式で実習2日目の終了直後に希望者に対して行った。

限られた講義時間数の中で学生によりインパクトを与えモチベーションを高めるには講義開始前に行うことが最も良い方法であろうと考えられたので今回はこれを採用した。その結果、本実習による動機付けが、卒後教育にもよく反映されるものと推測できた。しかしながら、過剰な反応や拒絶を示す状態にあるものも少なからず存在していた。過剰な反応や拒絶を示した学生に対してはフォローアップが必要になるであろうし、将来職業を選択するときの仕事の内容についても看護という広い範囲において検討する必要が生じてくるかも知れない。今回の講義開始前の微生物学実習は看護上必要な微生物に対する意識を持たせ、手洗いや手指の消毒を含めたスタンダードプリコーションの理解とともに勉学への動機付けを十分喚起するものと考えられた。